

第3章 家族生活

お茶の水女子大学生生活科学部教授 藤崎 宏子

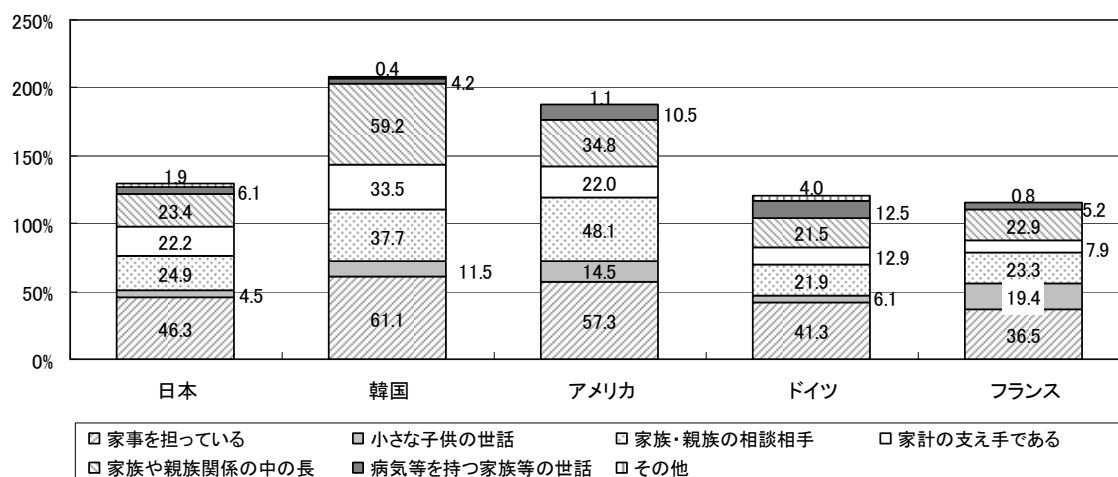
I 家族・親族の中の役割 (Q3)

1 調査結果の概要

高齢者たちは、家族・親族のなかでどのような役割を果たしているのだろうか。図3-1は、「家事を担う」「小さな子どもの世話」から「その他」まで含めて、7項目の各選択肢に対する肯定率を積み上げたものである。複数回答の合計比率に注目すると、韓国とアメリカは200前後と高い値を示すのに対し、日本、ドイツ、フランスは120前後と相対的に低い値に留まっている。各国回答者の平均回答項目数、すなわち一人が平均何種類の役割を担当しているかをみると、多い順に、韓国2.08、アメリカ1.88、日本1.29、ドイツ1.20、フランス1.16という結果である。個人が担う役割の多さは、一方では負担感にもつながるが、もう一方で、他者との絆を強め自らの存在感や有用感を確認する術ともなる。日本の高齢者は、家族生活の中で、必ずしもそうした存在感や有用感を感じられていないのかもしれない。なお、第5回調査においては、韓国と日本はこの合計比率が最も低い国であったが、今回調査では韓国が5カ国中最も高い値を示していることも特筆すべき点である。

具体的な役割の内容に注目すると、いずれの国でも「家事を担う」を挙げるものが最も多い。ただし、日本におけるその比率は45.1%と、韓国60.4%、アメリカ67.0%に比べて相対的に低い値を示している。日本におけるその他の項目に注目すると、「家族・親族の相談相手」「家族や親族の中の長」「家計の支え手」が、22~24%で次いでいた。

図3-1 家族・親族の中の役割(複数回答)



2 時系列的变化

第4回調査までも類似した設問が用いられてきたが、第5回では回答者の範囲を変更するとともに、質問文および選択肢に若干の修正が加えられた。回答者の範囲は、第4回までは単身者を除いてたずねていたのだが、第5回以降は全員に問う設問とした。また質問文については、過去4回の調査では、「ご家族の方々の生活に何か役に立っていると思いますか」とたずねていたものを、第5回以降は「ご家族や親族の方々の中でどのような役割を果たしていますか」という表現をとった。さらに選択肢については、質問文の変更に合わせて各項目の表現を若干修正するとともに、「病気や障害をもつ家族・親族の世話や介護をしている」を新たに加えた。このような変更もしくは修正は、近年における高齢者の家族形態や家族関係の変化を考慮して、たとえ単身者であっても、家族・親族ネットワークの中で一定の役割を果たしているのではないかと想定したがゆえにおこなった。

以上のような事情により、本データによっては時系列的变化を正確にとらえることはできない。しかしここでは、近似的に時系列的变化の趨勢を把握するため、第5回、第6回の調査データについては単身者を除外して、第1～4回調査の条件と近いサンプル特性に統制した上で単純集計結果を求めた。その結果が、表3-1である。

日本の第5回から第6回調査にかけての変化に注目すると、各項目とも小幅な変化にとどまり、おおむね類似した傾向性を示している。第1回からの長期的な動向については、「小さな子どもの世話」「家族・親族の相談相手」「家族や親族関係の中の長」などのポイントの低下が目立つ。また、「特に役割はなし」とする人は、第1回から第4回までは5ポイント前後にとどまっていたものが、第5回21.7%、第6回17.0%と一定の比率を占めるようになったことが目を引く特徴である。前述したように、第5回以降は設問の対象を単身者にも広げるとともに、役割の関係先を同居家族に限定せず「家族・親族関係の中」に広げた。にもかかわらず、全般的には役割の多様性は低下している。日本の高齢者において、家族・親族関係が質的に変化してきていることを推させる。

表 3-1 家族・親族の中の役割(時系列)

	日 本						ア メ リ カ						韓 国						ド イ ツ						フ ラ ンス	
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第1回	第3回	第4回	第5回	第6回	第3回	第4回	第5回	第6回	第1回	第6回			
1 家事	36.9	37.9	43.5	43.1	40.7	45.1	84.8	88.0	81.6	84.1	76.9	67.0	51.9	68.2	64.4	55.3	60.4	54.4	56.7	72.7	52.7	34.2	44.6			
2 小さな子供の世話	16.1	13.6	15.0	12.5	7.8	4.9	9.2	12.5	19.8	19.6	14.8	16.7	36.6	28.9	19.6	10.5	14.0	12.5	14.0	8.0	7.1	16.5	22.8			
3 家族・親族の相談相手	40.8	40.7	42.8	42.5	26.0	27.1	72.9	80.9	69.7	74.5	49.5	52.4	43.2	56.8	49.5	16.9	40.7	52.9	66.8	20.7	27.7	18.7	27.5			
4 家計の支え手	26.5	26.6	28.8	29.8	26.6	23.8	26.4	26.6	21.6	26.0	59.9	24.3	12.7	19.9	20.3	22.3	35.8	38.1	49.8	39.7	19.0	5.9	9.3			
5 家族や親族関係の中の長	33.5	33.1	30.7	30.3	19.3	25.1	53.4	61.4	52.4	48.2	50.5	34.4	35.3	45.4	45.8	33.5	63.5	35.6	36.8	39.2	28.0	20.4	27.8			
6 病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護					6.4	6.5					19.9	13.0				5.1	5.0			13.7	15.4		6.0			
7 その他	20.1	24.6	25.4	26.7	3.1	2.1	43.8	61.9	16.5	15.9	6.5	0.8	2.3	3.2	5.6	0.1	0.4	12.2	11.0	2.2	3.4	3.0	1.3			
8 特に役割はなし	6.8	7.2	4.1	4.7	21.7	17.0	0.0	0.7	2.3	1.0	2.9	9.9	15.2	8.6	10.0	17.5	8.2	4.9	1.6	4.5	18.6	9.1	21.5			

注) 第1～4回までは、単身者はこの設問の対象外。第5、6回については単身者も含めてたずねているが、この集計では単身者は除外した。

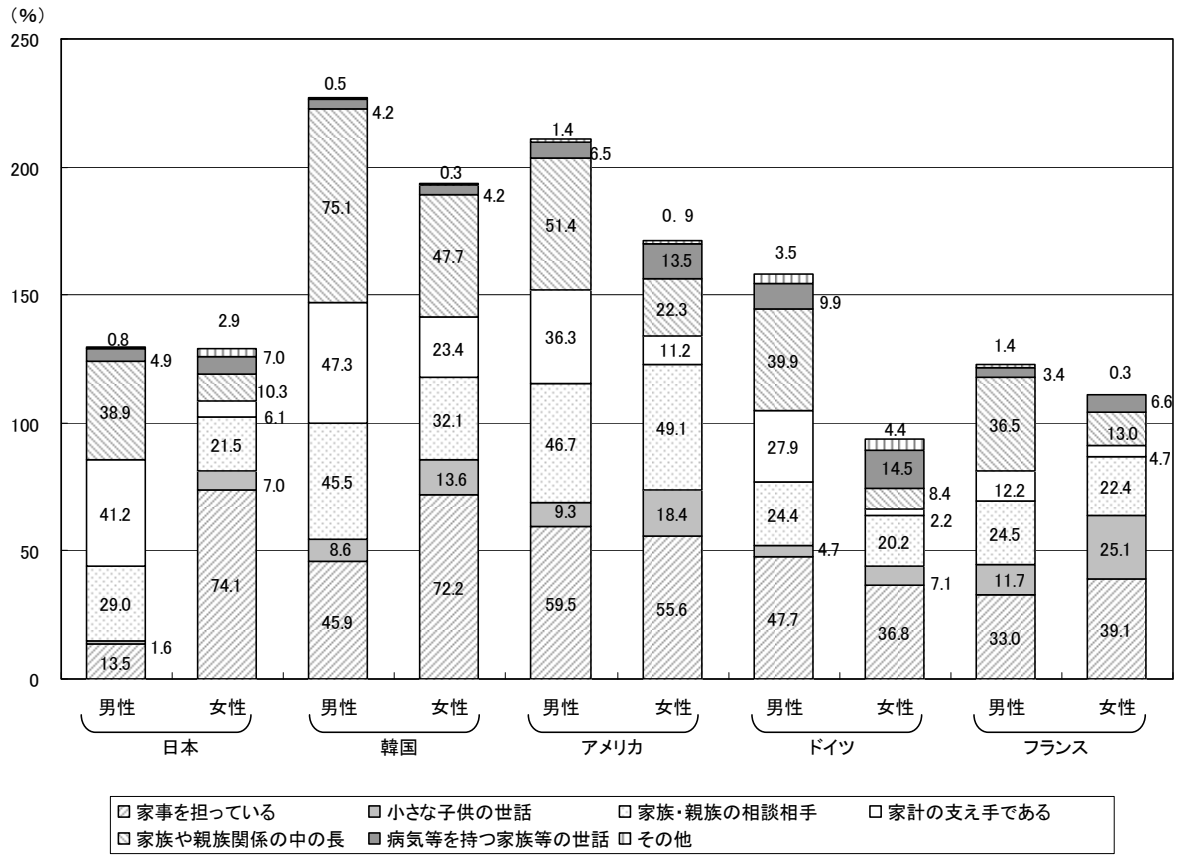
対照的なのは韓国である。過去6回の調査で、唯一「小さな子どもの世話」については、第1回(36.6%)から第6回(14.0%)にかけて大幅に低下しているものの、その他の項目では、ほぼ水準を維持するかポイントを上げてきている。とりわけ、「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」におけるポイントの上昇が目立つ。またアメリカやドイツの長期的動向については、一部の項目を除き、全般的に低下の傾向が示された。

3 男女別比較

図 3-2 は、7種の役割項目に対する肯定率を、国別・男女別に積み上げたものである。図 2-1 で指摘した、担当役割の合計比率は韓国が最も高く、アメリカがこれに次ぐという傾向は、男女別にみても変わらない。各国における担当役割の一人あたり平均個数を多い順にみると、男性については、韓国 2.27、アメリカ 2.11、ドイツ 1.58、日本 1.30、フランス 1.23 となっている。女性については、韓国 1.94、アメリカ 1.71、日本 1.29、フランス 1.11 の順であった。

日本について、具体的な役割項目の男女差に注目すると、「家事を担う」は、男性 13.5%、女性 74.1%と、大きなアンバランスが目につく。他の4カ国においては、男性が「家事を担う」という回答が 33.0% (フランス) から 59.5% (アメリカ) までの範囲であることと対比して、日本の高齢男性の家事参加率の低さは際立っている。他方、「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」に関しては、男性の 41.2%、38.9%が担当しており、女性の 6.1%、10.3%を大きく上回っている。日本において、男性が生活費を稼いで家族を統率し、女性は日常的な家事を担当するという性別役割分業は高齢期においても強固に維持されており、この傾向は第5回調査時とも基本的に同様であった。

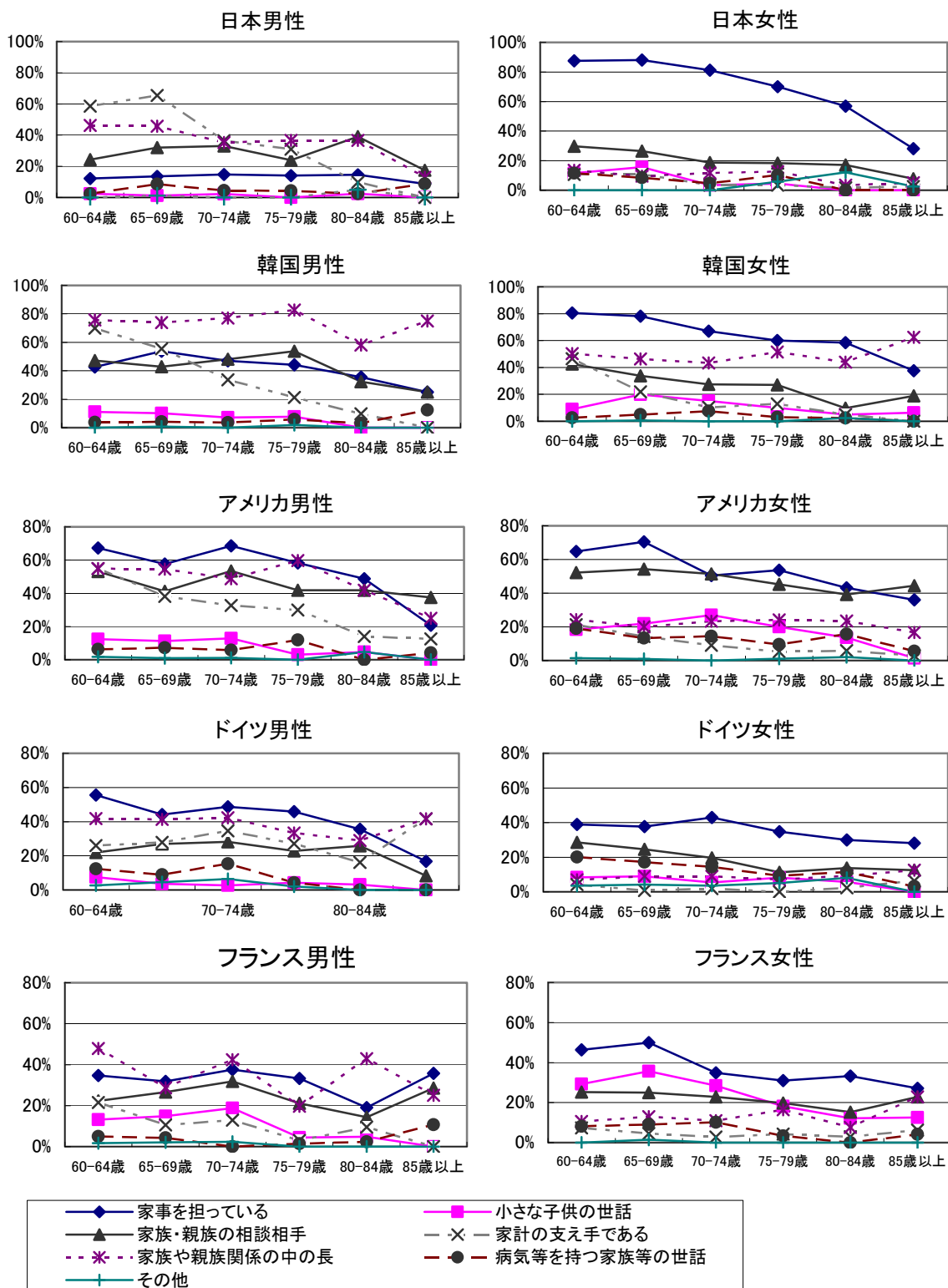
図 3-2 男女別家族・親族の中の役割



4 年齢階層別比較

前項で確認したように、高齢者が家族・親族の中で果たしている役割の内容には男女差がみられ、とりわけ日本ではその差が顕著であった。このため、年齢階層別の差異をみるにあたって、男女別にサンプルを分けた上で集計をおこない、その結果を図3-3に示した。

図3-3 男女別年齢階級別・家族・親族の中の役割



まず男性のデータに注目しよう。日本の男性は、年齢階層が高くなるにしたがって、「家計の支え手」を挙げるものの比率が58.5%から0%まで大幅に低下する。しかし、「家族・親族の相談相手」「家族や親族関係の中の長」などの比率は、85歳以上のカテゴリーを除けば相対的に安定している。「高齢者」もしくは「親」という権威に裏付けられた象徴的な役割は、加齢の影響が及びにくいようである。

韓国の男性も「家計の支え手」をあげる人の比率は、年齢階層の高まりとともに69.9%から0%へと低下する。しかし、「家族・親族の相談相手」「家族や親族関係の中の長」などを挙げる人の比率が相対的には安定している傾向は、日本と同様である。

アメリカ、ドイツ、フランスの3カ国の男性は、日本や韓国に比べ、年齢階層の高まりにともなう「家計の支え手」の比率の低下が相対的に緩やかである。ただしアメリカ男性の場合は、54.9%から12.5%へと低下しており、フランスの場合は、60歳代前半の段階で21.5%と低い水準であり、最終的に0%まで低下する。ドイツは、60歳代前半から85歳以上にかけて26.0%から41.7%へと不規則な動きを示すことが特徴的である。そしていずれの国の男性も、「家族・親族の相談相手」「家族や親族関係の中の長」などの象徴的な役割は、高齢になっても維持し続けている点は共通する特徴である。

次に女性のデータをみることにしよう。まず日本の女性に注目すると、女性総数についてみた場合と同様に、「家事を担う」を挙げる人が突出する傾向を、すべての年齢層を通じて確認できる。ただし、その比率は、年齢階層の高まりとともに87.5%から28.2%へと低下する。他の6項目もおおむね減少の方向にあるが、もとの比率が高くないこともあって大きな変化とはいえない。

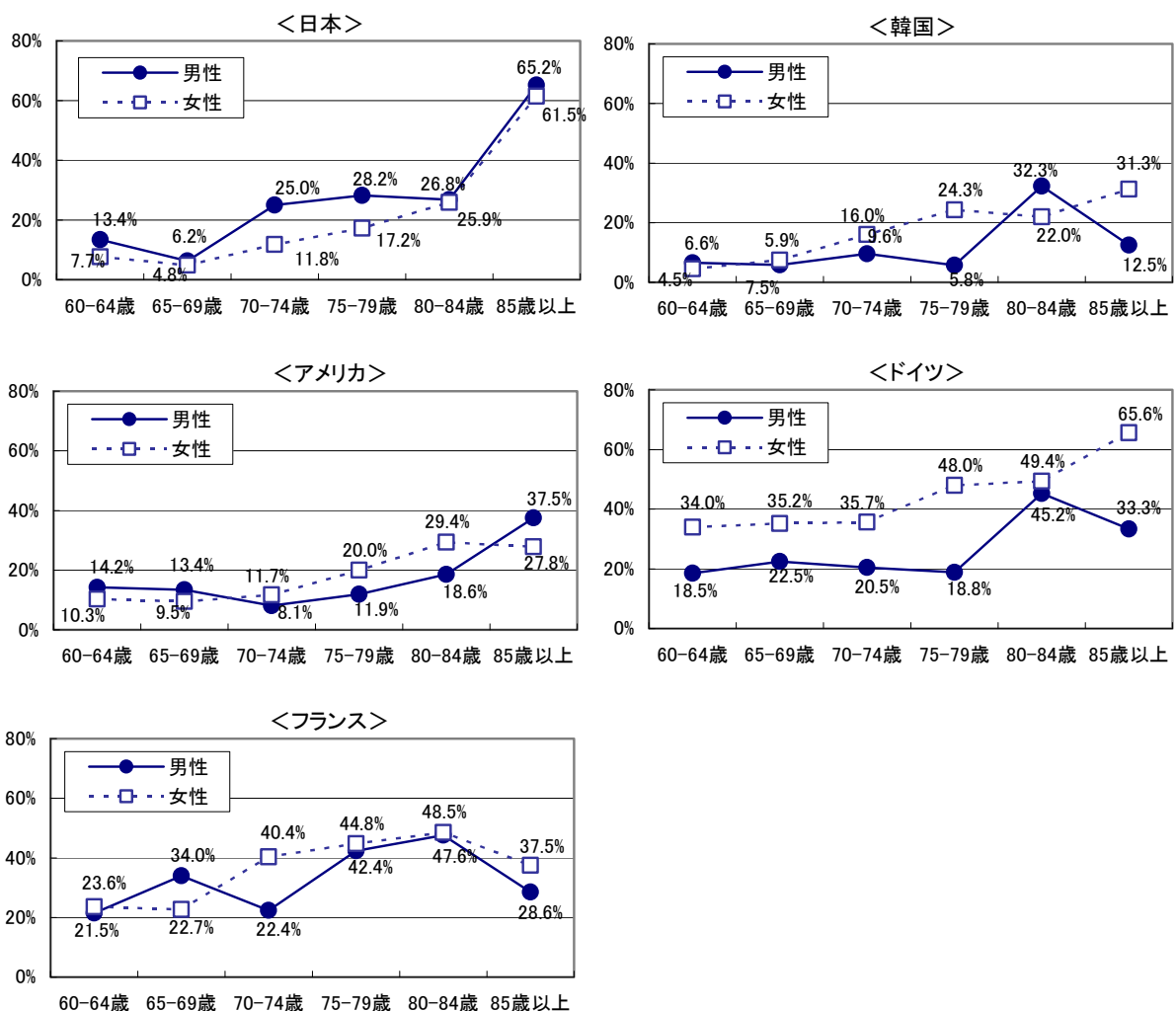
韓国および欧米3カ国の女性は、おおまかにみれば似通ったパターンを描いている。すなわち、「家事を担う」がほぼすべての年齢層で最も高い比率を示し、年齢階層の高まりとともに緩やかに低下していく。他の役割も大まかにみれば、年齢階層の高まりに対応した低下を示すものが多いとはいえ、日本に比べれば最終的な比率の低下は小幅なものにとどまっている。また、「家族・親族関係の中の長」（韓国、フランス）、「家計の支え手」（韓国）など、むしろ高年齢層で再び比率を伸ばす項目もみられた。ここでは、前回の第5回調査において日本女性と似通った傾向を示した韓国女性が、今回調査ではむしろ欧米女性に近いパターンを描いており、日本女性のみ特有のパターンを描いていることに注目したい。

この設問の選択肢には、これまでに紹介してきた7項目に加え、「特に役割はない」という選択肢も用意されている。そこで、7項目のいずれにも○をつけず、「特に役割はない」と回答した人

の男女別・年齢階層別比率に注目し、これを図 2-4 に示した。全般的には、国や性別の違いを越えて、年齢階層が高くなるほど「特に役割がない」とする人の比率が高くなる傾向がみられる。ただし、韓国男性、ドイツ男性、フランスの男性と女性は、85 歳以上の最も高い年齢層で「特に役割がない」とする人の比率が再び低下するところが特徴的である。

日本の男性と女性に注目すると、80-84 歳までは「特に役割がない」とする人の比率が他国と比して高いとはいえないが、85 歳以上になると、男性 65.2%、女性 61.5%と、きわめて高くなる。5 カ国中もっとも長寿国である日本において、人生の最終段階での家族・親族内での役割の減少は、みずからの有用感や生きがいの低下につながるのではないかと懸念される。

図 3-4 年齢階層別家族・親族の中で「特に役割がない」人

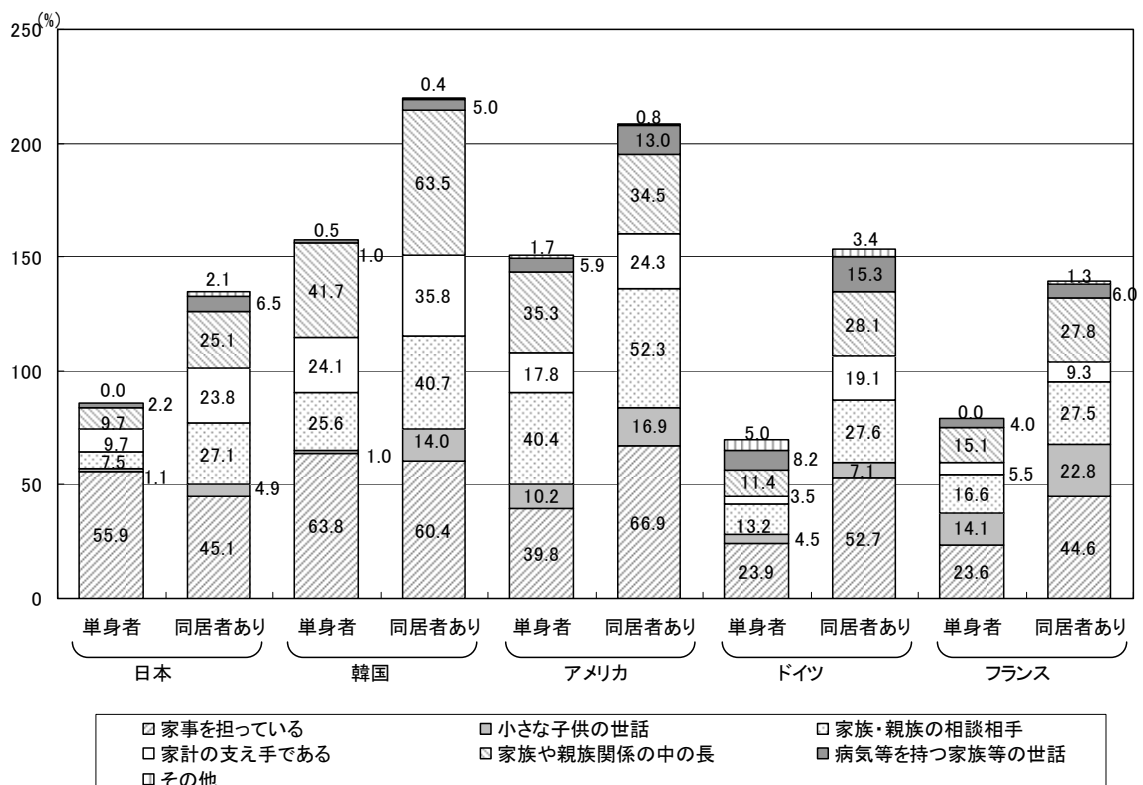


5 同居者の有無による差異

すでに述べたように、この設問は第5回調査以降、単身者も含めた全員にたずねている。たとえ家族・親族と同居していなくとも、相互に日常的な交流があり、そこに形成されるネットワークの中で高齢者が一定の役割を果たしているのではないかと考えたためである。しかし実際には、役割のありようは、同居者の有無により異なる可能性がある。そこで、各国のデータにつき、同居者の有無別に高齢者の役割担当状況をみることにした。なお、ここでいう同居者とは、大半が家族・親族であるが、ごくわずかそれ以外の他人である事例も含まれている。

図3-5からわかるように、単身者は同居者のいる人に比べて役割の数が少ないという傾向がみいだせる。ただし、総数レベルで高い合計比率を示した韓国とアメリカは、単身者に限定しても150前後の相対的に高い値を示す。これら2カ国の役割の内容をみると、「家事を担う」（韓国63.8%、アメリカ39.8%）のみならず、「家族・親族関係の中の長」（韓国41.7%、アメリカ35.8%）、「家族・親族の相談相手」（韓国25.6%、アメリカ40.4%）などの比率の高さが目立つ。他方、日本の場合は、「家事を担う」については55.9%と過半数の単身者が挙げるものの、その他の役割を挙げるものは10%にも満たなかった。

図3-5 同居者の有無別家族・親族の中の役割



II 家事の担当者 (Q1a, 1b)

1 調査結果の概要

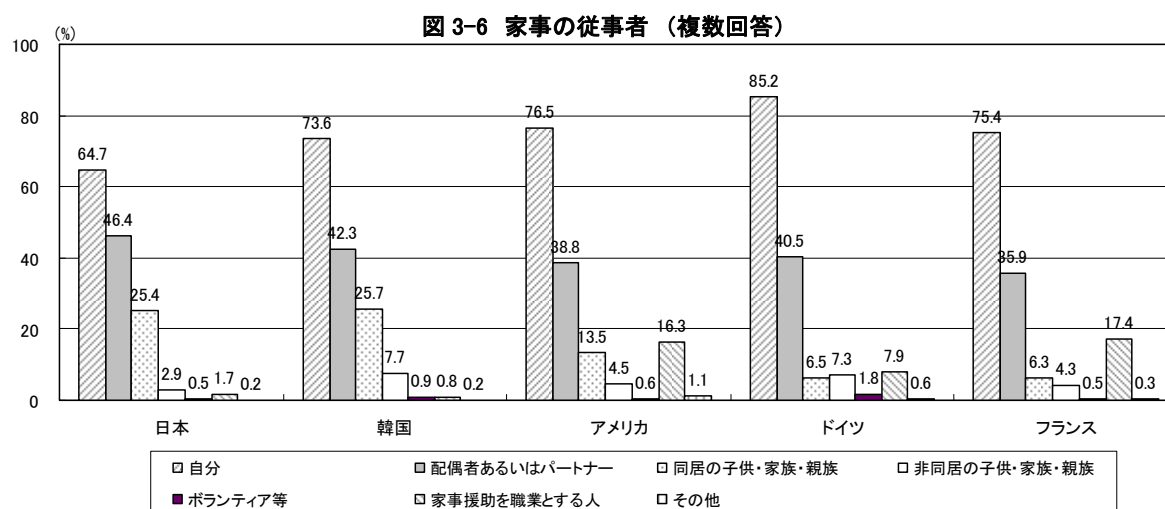
(1) 複数回答の結果

家事の担当者に関する設問は、第5回で初めて設けた。ただし前回は、Q1bの主な担当者につき単一回答を求める設問のみで、Q1aのような複数回答は求めなかった。まず図3-6により複数回答の結果(Q1a)をみることにしよう。

5カ国とも、最も多くの人々が挙げているのが「自分」であり、比率の高いほうから、ドイツ85.2%、アメリカ76.5%、フランス75.4%、韓国73.6%、日本64.7%となっている。これに次ぐのが各国に共通して「配偶者」で、比率の高いほうから、日本46.4%、韓国42.3%、ドイツ40.5%、アメリカ38.8%、フランス35.9%となっている。「自分」と「配偶者」の比率は、回答者の性別により大きく異なっているが、この点は次の単一回答の結果とも重なるため、そちらで触れることにする。

それ以外の回答で注目したい点は、まず「同居している子どもや他の家族・親族」を挙げる人の比率である。日本と韓国は、25.4%、25.7%と、アメリカ(13.5%)、ドイツ(6.5%)、フランス(6.3%)に比して相対的に高いことが特徴的である。ただし、同じく家族・親族でも、「同居していない」人になると、日本は2.9%と、5カ国中最も比率が低くなっている。

一方、「家事援助を職業とする人」を挙げる人の比率は、フランスとアメリカが17.4%、16.3%と高く、韓国(0.8%)、日本(1.7%)はきわめて少数であり、ドイツ(7.9%)は中間的な値を示す。公的サービスもしくは商業サービスとしてのホームヘルプサービス等の一般化の程度の違いが反映された結果といえるだろう。

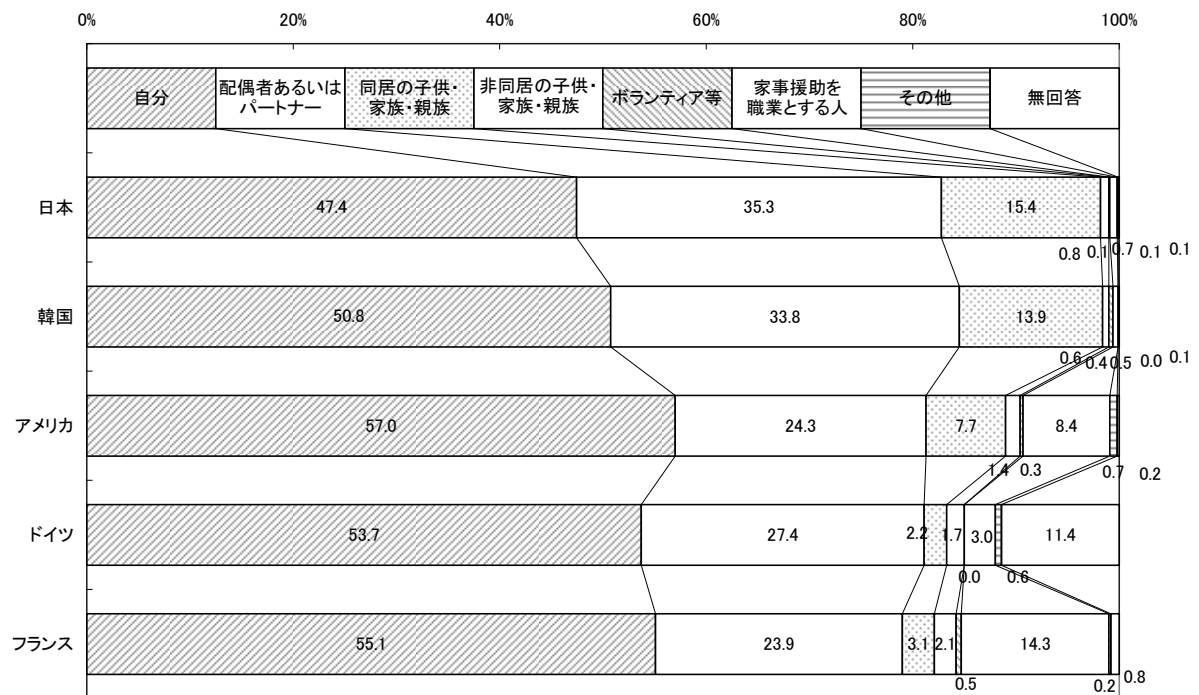


(2) 単一回答の結果

図3-7は、国別にQ1bの主な家事担当者の単純集計結果を示したものである。5カ国に共通して、「自分」を挙げる人が最も多く、比率の高いほうから、アメリカ57.0%、フランス55.1%、ドイツ53.7%、韓国50.8%、日本47.4%となっている。次いで「配偶者」を挙げる人が多いのも共通する傾向であり、日本35.3%、韓国33.8%、ドイツ27.4%、アメリカ24.3%、フランス23.9%である。「自分」と「配偶者」の比率を合計すると、いずれの国でも8割前後に達し、これらの国における高齢者は、日常的な家事を夫婦間もしくは自分単独で処理している人が大多数を占めているといえる。

それ以外の点で、日本と韓国に共通する特徴は、「同居している子どもや他の家族・親族」を挙げる人が、15.4%、13.9%と相対的に多いことである。他方、アメリカとフランスでは、日本や韓国ではほとんどみられない「家事援助を職業とする人」を挙げる割合が8.4%、14.3%いることにも注目したい。とりわけフランスは、複数回答で17.4%であった比率からほとんどサンプルの脱落がない比率が示されている点で、ホームヘルパー等が高齢期の日常生活を支える重要な資源とみなされていることが推測できる。

図3-7 主に家事をする人



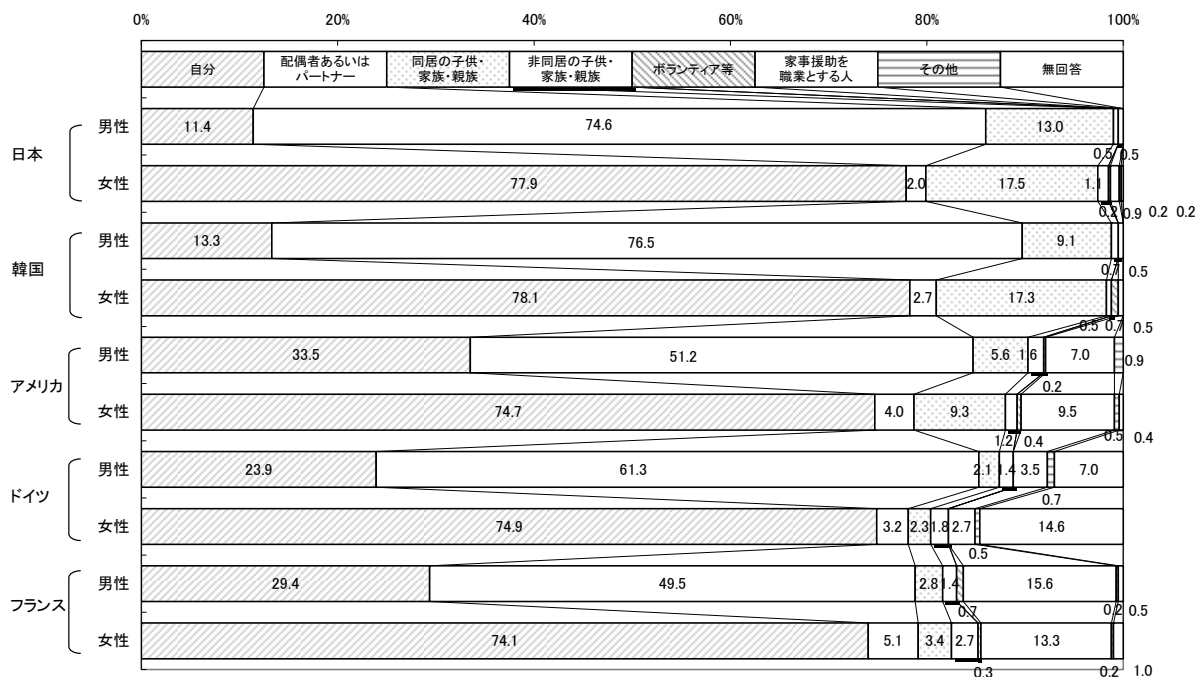
2 男女別比較

以下では、「主な家事担当者」(Q1bの単一回答の結果)に限定して、性別、年齢別の傾向性についてみていくことにしよう。

図3-8は、各国のデータを男女別に示したものである。5カ国に共通して、回答の男女差が著しく、男性は「配偶者」を挙げる人が最も多く、女性は「自分」を挙げる人が各国とも7割を超えている。具体的な数値を挙げると、男性が「配偶者」を挙げる比率は、比率の高いほうから、韓国76.5%、日本74.6%、ドイツ61.3%、アメリカ51.2%、フランス49.5%であるのに対し、「自分」については、アメリカ33.5%、フランス29.4%、ドイツ23.9%、韓国13.3%、日本11.4%と、低い水準にとどまっている。他方、女性の場合は、「自分」を挙げる人の比率が、韓国78.1%、日本77.9%、ドイツ74.9%、アメリカ74.7%、フランス74.1%であるのに対し、「配偶者」は、フランス5.1%、アメリカ4.0%、ドイツ3.2%、韓国2.7%、日本2.0%と、いずれの国も1割にも満たない。女性の回答には国による違いはほとんど見受けられないが、男性の回答には若干の差異があり、「自分」を挙げる人が、日本と韓国では1割強にとどまるのに対し、欧米3カ国は2割強～3割強と相対的に多くなっている。

ホームヘルパーなど「家事援助を職業とする人」を挙げる比率が相対的に高かったアメリカとフランスでは、この項目を男女別にみても大きな差異は確認できず、男女ともに相対的に高い比率を示していた。

図3-8 男女別・主に家事をする人



3 年齢階層別比較

前項でみたとおり、家事の担当状況には大きな男女差がある。したがって、年齢階層別のデータ集計は、まず男女別にサンプルを分けたうえでおこなった。

図 3-9 により、まず男性のデータをみていこう。日本男性の場合、「配偶者」を挙げる人が多いという傾向は、ほぼすべての年齢階層に共通してみられる。とはいえ、60 歳から 74 歳までは 8 割前後を占める「配偶者」の比率は、70 代後半から徐々に低下していき、85 歳以上になると 34.8% と 3 分の 1 程度まで下がる。この変化は、配偶者の死亡によるところが大きいものと推測される。これに代わって比率を伸ばすのは、「同居している子どもや他の家族・親族」である。70 代前半まではヒトケタであった比率は、70 代後半 25.4%、80 代前半 26.8%、85 歳以上 43.5% と伸びていく。85 歳以上では「自分」という回答も 17.4% あるものの、全体からみれば少数に留まっている。日本男性とほぼ同じパターンを描くのは韓国男性であり、高齢になるほど配偶者をあてにできなくなる状況を同居する子どもなどの援助により埋め合わせている。

欧米 3 カ国については、日本や韓国に比べると「自分」を挙げる人の比率がどの年齢層でもおむね高いこと、「配偶者」を挙げる人は日本や韓国ほどではないにしても高い比率を占めていること、しかしその比率は 80 歳前後から低下していくことなどの諸点を共通して確認できる。3 カ国で異なるのは、とりわけ 80 歳以上の配偶者がいないと思われる高齢者の対応の仕方である。フランスの場合、「家事援助を職業とする人」を挙げる人の比率は、80-84 歳 38.1%、85 歳以上 46.4% ときわめて高いことが注目される。アメリカ男性の同比率は 14.0%、16.7%、ドイツ男性は 9.7%、8.3% であるのに比べて、比率の高さが際立っている。

では、女性の場合はどうか。日本女性についてみると、60 代前半で 97.1% を占めた「自分」の比率は、年齢層が高くなるにしたがって低下し、85 歳以上では 33.3% にまで減少する。これに代わって日本と韓国の 2 カ国とも増えるのは「同居している子どもや他の家族・親族」である。日本女性は 2.9% から 53.8% へ、韓国女性は 7.1% から 81.3% にまで増加している。日本と韓国の女性は、日常の家事遂行を基本的には家族・親族の範囲内で対処しようとしていることがうかがえる。

欧米 3 カ国の女性はどうに対処しているのか。まずフランス女性の場合は、男性と同様に 80 歳以上の年齢階層で「家事援助を職業とする人」を挙げる割合が高く、80 代前半で 37.9%、85 歳以上で 39.6% を占めている。なお、アメリカ女性の同比率は 29.4%、20.8%、ドイツ女性は 4.6%、12.1% であった。いずれの国も、日本や韓国に比べ配偶者以外の家族・親族を挙げる

人の比率は低いものの、唯一アメリカ女性は、80-84歳で17.6%、85歳以上で26.4%の人が「同居している子どもや他の家族・親族」を挙げていた。

図 3-9 年齢階級別・主に家事をする人

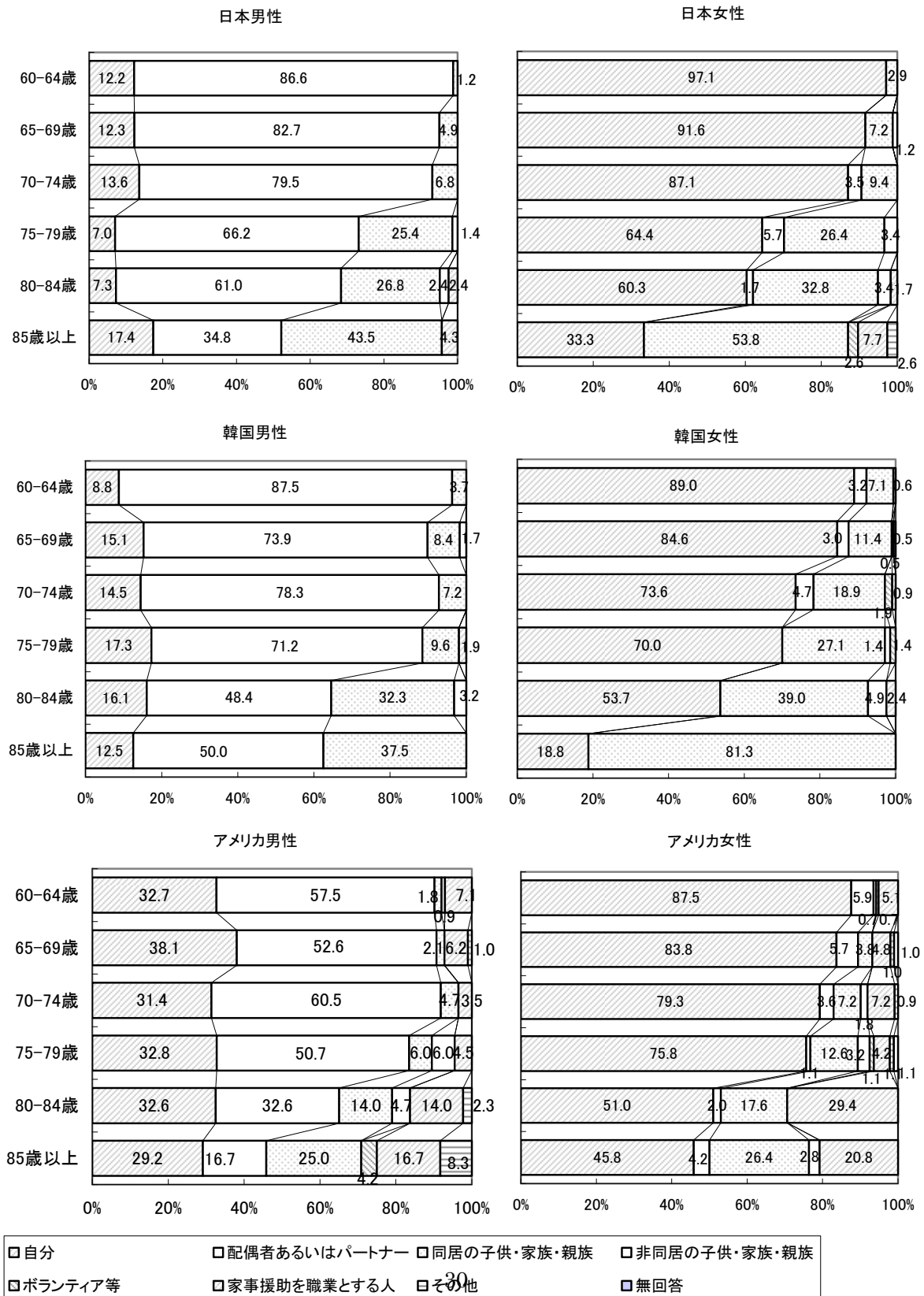


図 3-9(続き) 年齢階級別・主に家事をする人

